

特集 有機農業のいまとこれから —持続可能な社会への貢献—

オーガニックマーケットを活用して有機農業を広げる

オーガニックファーマーズ名古屋代表

よしのたかこ

朝市村のこれまで

「オアシス 21 オーガニックファーマーズ朝市村」は、2004 年にはじめた有機農家が自分で栽培した野菜を毎週土曜日に販売する朝市だ。2021 年 10 月に 17 周年を迎えた。

出店者は農業以外の仕事に携わる「非農家」の家庭で育ち、さまざまなきっかけで農業を志した有機農家だ。農家で育ち親元就農した人も多少はいるが、親が慣行農家で子どもの代で有機に「転換」した農家と、短期での就農が難しい果樹などの農家に限っている。

メンバーは愛知県を中心に、同県と接する岐阜県・三重県・長野県・静岡県の 60 軒の有機農家で、半数以上は 30~40 代だ。

この朝市を着想したのは、名古屋市役所から都市公園「オアシス 21」に取締役として出向していた、環境分野の仕事経験を持つ行政マンだった。「休日早朝のにぎわいと、オアシス 21 の名物づくり」という二つの課題を市長から与えられ、答えとして環境に配慮した有機農家の朝市という結論にたどりついた。私は準備段階に声をかけられ、それ以来、運営に関わってきた。

私自身は仕事として有機農業に関わって 30 年以上になる。当初、農業にまったく関心がなかったが、自分と家族が食べるために入会した有機宅配団体の仕事を手伝うようになり、有機農業に携わる農家の思いにふれ、畑や田んぼの多様性と面白さにひかれた。

東京農業大学に学士入学して農業の基礎を学びながら、有機産直に取り組む団体の協議会や有機農業学会の事務局をしていた頃、研究者や農家から「新規で有機農業をはじめると人は多いが、やめる人も多い。理由は販路が少ないことだ」と何度も耳にする機会があり、それがずっと意識の中にあった。

有機農家がまだ少なかった時代だったこともあり、当初、朝市村では有機農家なら誰でも出店可能としていたが、「新規就農した人たちの販路」がずっと頭にあり、販路を持つ既存の有機農家ではなく、販路がない新規就農者のための朝市をはっきり目標に掲げるようになった。初期から支えてくれているベテラン農家は今も参加しているが、就農希望者のための研修を担う農家として、現在も参加してもらっている。

有機のファーマーズマーケットで実現できること

朝市村をはじめた頃は単なる販売や交流の場だととらえていたが、運営を重ねるうち、いろいろなことが実現できていると感じるようになった。これまでに気づいたのは、次のようなことだ。

1) 有機で新規就農した農家の、販路開拓・マッチング

個人客だけではなく、有機農産物を扱う会社や小売店、飲食店などに出会う場でもある。地域ごとに出荷グループもつくり、販路を広げている。

2) 中山間地に就農した有機農家と都市の消費者がつながり交流する

モノのやりとりだけでなく、農家と話すことを楽しみにしてやってくる人が多いことに驚かされる。

3) 消費者が農家で農業体験をする、畑の入り口

農家と直接つながり、畑に出かけていく消費者は多い。

4) 毎週開催で有機を日常に

有機の野菜は日持ちが良い。多くの野菜は前日収穫だから新鮮で、週に 1 回の朝市の野菜だけで 1 週間暮らすことができる。

5) 農家が納得いく価格で、情報を載せて販売できる

直売所はどうしても安売り合戦になってしまう。朝市村では新規就農者の生活が成り立つことが大切だととらえており、周囲の農家より安い価格をつけないことを基本とし、終わり間際に売り切るための安売りもしない。安売り合戦に陥ることを防いでいる。

6) 仲間の有機農家と切磋琢磨しながら技術を磨き、新規就農者は技術を身につけていく

有機農家は点在し、他の有機農家の野菜を目にする機会が少ない。朝市村で他の農家の野菜を見ることが技術の向上につながり、当初より野菜の品質が向上した。農家同士仲が良く、アドバイスを交わし、互いの畑を見学している。教えあい、学びあう場になっている。

7) 子どもたちがボランティアとして朝市村に関わることで食に関心を持ち、成長する

母親とボランティアにやってくる子どもたちは、野菜をよく食べる。農家と会話し販売を手伝うことが食育につながっている。

8) さまざまな形で小さな農家を育てる

2019～2028 年は国連「家族農業の 10 年」にあたる。非農家から新規就農する人たちの多くは小さな農家だが、小さな農家が続いていくことを意識し、支援している。

新規就農希望者の支援

9) 研修受け入れから就農後のサポートに至る、新規就農希望者の支援の場

非農家で育った人が「有機農家になりたいが、相談場所が見つからない」と朝市村に相談にやってくるようになったのは 2008 年頃だ。

私は 2008 年にはじまった国の有機農業支援事業の参入促進事業に関わっており、有機就農のための相談窓口を調べたことがある。定期的に行われる相談窓口が全国どこにもないことに気づき、2009 年 10 月から朝市村に窓口を設けるようになった。

2012年には愛知県の研修機関として登録、条件が合えば国の青年就農給付金（現在の農業次世代人材投資資金）を受けられるよう支援をはじめた。

相談者は1か月に1人～数人。農業体験なしで就農を希望する人が多いのに驚かされるが、短期間の体験を受けてもらおうと、それで終わりという人が残念ながら大半だ。

多少農業経験がある人は農家で適性を確認してもらった上で、就農地や作目の希望などを聞き、研修場所の候補を決めて研修受け入れ農家につなぐ。本人が現地に出向いて話し合い、研修地を決める。これまでに朝市村の農家が育てて就農した人は、愛知・岐阜を合わせると50人を超える。

就農者が地域の力に

10) 朝市村を通して就農した人たちが、地域の新たな力になる

朝市村を通して就農した人たちが地域の新たな力になった顕著な例が、岐阜県白川町だ。これまでに朝市村経由で7組が有機就農した。就農後、彼ら自身がSNSやpod castなどさまざまな形で発信するようになり、新規就農希望者だけでなく農業以外の仕事に取り組む新たな移住者が直接やってくるようになった。地元TV局のドラマにもなり、人口が減少する一方の白川町で移住者を増やしている。4つある集落のうち有機農家の多い2集落では空き家がなくなり、希望者があっても受け入れが難しくなっている。

白川町は中山間地域なので、条件の良い農地を確保することが難しい。冬の積雪はほとんどないが、厳しい寒さで農業ができない。しかし、豊かな自然に恵まれている。就農者たちは、夏には農業にしっかり取り組みつつ、農的で自然を生かした仕事を併せ持って暮らしている。様々な農業体験・自然を生かした子どもたちの体験・美しい景観の中でのバーベキュー・都市部の人たちが訪れるマルシェ・川辺の岩場でのボルダリングなどは、関係人口を大幅に増やすだけでなく、地域で暮らし続けてきた若者を運営に巻き込むことで、外側から見た町の魅力を地域の若者に実感してもらう機会ともなっている。

また、林業・狩猟・有機の堆肥や育苗培土づくりなど、地域の人たちが関わる農林業に直結する取り組みも多い。

移住後に町外の人と結婚して子どもに恵まれた人も多く、有機農業に関わる移住者だけで、子どもも含め町の人口の0.65%を占めるまでになった。人口減に悩む中山間地域の存続に、彼らが果たしている役割は大きい。

今、抱えている問題

就農相談を受けていて気づいた最近の傾向は、慣行農家の子弟が就農する際に、有機への転換を希望する例が増えていることだ。地域の理解を得ることが前提になるが、祖父や父が持っている優良な農地を継承し、栽培技術を持つ親族が近くにいることで、力量のある有機農家が生まれる可能性は高い。

一方、非農家から就農する人には農地や農業機械・施設などの基盤がないので、全般的な支援が不可欠になる。

企業を退職して取り組む人は退職金を資金にする場合も多いが、20代や30代前半では手元に資金がない場合も多い。

機械・施設は必須の基本装備だ。準備してからはじめないと挫折することも多い。基本装備を整えるには、資金面の支援制度が不可欠となる。

現在の就農支援の制度は2~3年という短いスパンで要件や運用方法が変わり、就農希望者が振り回されている。研修生が県の普及担当者と一緒に作る就農計画は、国の支援を前提として計画を立てているのだが、その制度が急変して支援を受けられなくなれば、就農を目前にして今後の就農設計を一から見直すしかなくなる。就農希望者が安心して農業に向き合える支援体制が生まれないことには、有機だけでなく、就農する人は減る一方だろう。

就農者の育成については、高齢化で減っている研修受け入れ農家を新たに育てつつ、並行して就農希望者も育てていく必要がある。私たちが取り組んでいるような小さな農家に頼る研修では限界があるので、有機農業を学ぶことができる学校のような形が必要とされていると感じている。

